

I 急病のときの対応

17. けいれんが起きたとき

家庭での処置

1. 衣服をゆるめ右下に横向きに寝かせる。
2. 口の中に嘔吐した物などないか確認、あれば掻きだして除去する。
3. 抗けいれん剤など処方されている場合は投与する。
4. けいれんの状態(けいれんの仕方、時間など)を観察する。
5. 発熱の有無の確認。



やってはいけないこと

- * ゆすったり叩いたり刺激を与える。(けいれん発作をさらに悪化させることがある)
- * 口の中に物を詰め込んだり、くわえさせたりする。(窒息の原因になる)

その後の対応

レベル2 その時点で病院受診

原則として救急で受診。

レベル3 緊急に病院受診、救急車要請

15分以上持続する。

* ただし、熱性けいれんの既往があり、医師からあらかじめ予防あるいはけいれん時の処置が指示されている場合はそれに従うが、インフルエンザなどの流行期には脳炎などの合併症もあるので注意が必要。

家庭で看る時のポイント

あわてず落ち着く事が大切です。通常5分以内に治まるのが普通ですが、それ以上止まらないときは救急車での受診を考えましょう。

けいれんの種類

熱性けいれん:熱の上がり掛けに起こり、熱が上がりきった状態、下がってきた状態ではあまり起こりません。高熱で起こるものではありません。

目を開いて一点を見つめて動かないか上方を見つめたきりで、顔色が悪くなります。体は反るような感じで両手を強く曲げ、時々、ガクガク震えたりします。なお、意識があって手足が寒くて震えるのは悪寒です。この場合、上がりきってしまえば止まります。せいぜい30分から1時間程度です。

無熱性けいれん:熱のない時、いきなり意識がなくなり、体をびくびくさせたり、全身堅くはないけれど、呼びかけに反応が無くなり、何処を見ているかわからなくなる等です。病院での検査が必要です。